

小野直子作 「トランプ占い」

- 北山千里 スペード、スペード、ダイヤでクラブと…。2に10、3、4、7だから、えっと、26。えー！ たったの26%！ ひどーい！ もう1回やってみよっと。
- (効果音) (トランプをめくる音。)
- 千里 ハート、おっ、ハートが出たぞ！ スペード、ダイヤ、スペードのエース。えー、スペードのエース？ 縁起悪い。そして5、11…。何これえ、また26%じゃない。やっぱり相性悪いんだ。サイテー。
- ナレーション わたし、北山千里。青春高校2年。昨日友達に教わったトランプ占いで、今のボーイフレンド、“達ちゃん”こと木村達也君との相性を占ったんだけど、このとおり、26%。全然低いの。こないだケンカしたのも、やっぱりこのせいかなあ。
- 弟友男 姉貴、何やってんだよ。さっきからご飯だって言ってんだろ。あ、くれえなあ。なんだよ、一人でコソコソ。あれ、トランプ占い？
- 千里 何よ、友男。ノックぐらいしてよ。
- 友男 10回くらいしたよ。全く、今どきトランプ占いなんて、ヘンなやつ。あの、達ちゃんとかいう人のこと、占ったんだろ。
- 千里 うるさいわね。さっさと行きなさいよ、もう。
- 千里(モノローグ) 本当に、トランプ占いなんて古いのかもしれない。やらなきゃよかった。26%なんて結果だから余計気になる。やっぱりあのケンカだ。絶対達ちゃんが悪いんだけど、この際、わたしから謝らなくちゃ。
- (効果音) (コンビニの店内)
- 店員(男) いらっしゃいませ。
- 千里 達ちゃ…、あ、木村さんいますか？
- 店員 あ、木村ですか？ ちょっと待ってて。おーい、木村、彼女。
- 木村達也 (出てきて千里に)なんだよ、バイト中だぜ。時間考えるよ。
- 千里 だって…。
- 達也 「だって」、なんだよ。早く言えよ。
- 千里 …もういい！(走り去る)
- 達也 あ、おい、千里！ なんだあいつ？
- 店員 なんだ、ケンカか？
- 達也 いえ、別に。
- (効果音) (街の雑踏)
- 千里(モノローグ) バカ バカ バカ バカ！ 達也の大バカ！ 何よ、人の気も知らないで。う～頭に来た。謝って、仲直りして、明日映画に誘おうと思ったのに。このチケット…、あームカつく。破っちゃえ！ でももったいないな。大枚2000円もはたいちゃっ

たもん。(ため息)あ～あ。

木内則子 いよ！ 何ブツブツ言ってるの？

千里 あれ、則子ちゃん。びっくりしたぁ。

則子 千里、あんたガニマタで歩いてたよ。こんな。

千里 えー、ウソ、ヤだぁ。でもわたしさ、今、ムチャクチャ頭に来てんの。あ、則子ちゃん。明日映画行かない？ リバイバル3本立て。いいのばっかだよ。「炎のランナー」に「エレファントマン」に…。

則子 ダメダメ。明日テストだもん。千里、彼いるでしょ？ なんでわたしを誘うの？

千里 だって…。

則子 さては、ケンカしたな？

千里 もういいの。26%なんだもん。

則子 26%って？ ああ、トランプ占いやったんだ。最近はやってんもんね、うちのクラス。何が原因でケンカしたのか知らないけど、そんなん気にしないほうがいいよ。じゃここでね。

千里 あ、バイバイ。

千里(モノローグ) 「気にするな」か。気にしたくないわよ。でも、こんなにすれ違っちゃうんだもん。26%だっとうなずけちゃうじゃん。きっとなんかが2人の仲、裂いてんのよ。悪魔かな。それがトランプに現れるんだよ。ああ、どうしよう、26%…。達ちゃんのバカ！

(効果音) (玄関のドアの開く音)

千里 ただいまぁ。

母 あ、お帰り。さっき、木村さんて男の人から電話あったわよ。「又かけます」って。

千里 えー、ヤだなぁ。

母 ヤな人なのかい？

友男 とんでもない。大事な 大事なたった一人のボーイフレンドだよな、姉貴？

千里 うるさい！ ママ、今度かかってきたら「いない」って言ってよ。

母 「いない」たって、千里…。

(効果音) (電話の鳴る音)

千里 ママ、よろしくね。(そそくさと去る)

ナレーション とにかく、達ちゃんとは何も話したくないと思った。今話しても、どうせ口論に終わってしまうだろう。そしたらまたトランプの数字は下がって、本当に2人の仲は終わりになるかもしれない。わたしは食事もせず、布団をかぶってそのまま寝てしまった。

(効果音) (以下、夢の会話。エコー)

千里 たったの26%よ。

達也 千里、もうおれたちダメだよ。

千里 いや、行かないで。

達也 だって26%だけ。

高岡先輩 千里、スペードのエースに気をつける。

千里 どうして？

高岡先輩 あれが出たら終わりだぞ。

達也 バイバイ。

千里 バカ！ 達ちゃんのバカ！

高岡先輩 スペードのエース。

達也 26%。

高岡先輩 スペードのエース。

達也 26%。

千里 あー～(悲鳴)

(音楽) (不気味な感じ)

ナレーション 次の日。

(効果音) (街の雑踏)

ナレーション 今日は、テスト休みの高校が多らしく、街は若い子ばかりだ。みんな友達と楽しそうに歩いている。わたしは独り、映画を見るんだ。

高岡文也 すみません。学生1枚お願いします。

千里 え、高岡先輩。高岡先輩じゃないですか。久しぶりです。北山千里です。

文也 ああ、チサちゃん。映画？

千里 そうです。先輩、チケットあげますよ。これ2枚持ってるんです。

文也 いいの？ なんか悪いなあ。

切符窓口係 お客さん、委員ですか？

千里 あ、はい、すみません。先輩、入りましょ。

ナレーション 高岡文也さんは、中学の2年先輩で、スポーツ万能。クラスの委員長とかもやった、カッコいい先輩なのだ。実は、ひそかに片思いしてた初恋の人。まさか、こんなところで会うなんて。しかも、隣の席で映画見てるなんて。夢みたい。もうちょっとオシャレしてくればよかったな。わたしは、ドキドキしながらスクリーンを見ていた。

(音楽) (「炎のランナー」のテーマ。)

文也 よかったなあ。何度見てもいい映画だなあ。チサちゃん、チケットありがとう。

千里 あ、いいえ、無駄にならなくてよかった。エリック・リデルすごかったですね。

文也 うん、彼の信仰がすごいよね。神様を礼拝する日曜日に走らなければならなくなって。でも彼は、神に従うために、国王の命令さえ断るんだよな。この世の何ものにも支配されないあの勇氣…。僕なんかダメだなあ。比べるほうがヘン

か。(笑い)

千里 もしかして、先輩ってクリスチャン、なんですか？

文也 ああ。言わなかったっけ？

千里 へえー。リデルみたい。

文也 いやあ、とてもとても。チサちゃん、チケットのお礼にお茶おごるよ。行かない？

千里 本当ですか？ わあ、うれしい。

ナレーション もう残りの映画なんて関係なかった。先輩は「炎のランナー」だけ見に来たようだった。カッコいい先輩、クリスチャンだという先輩、優しい先輩。お茶を飲みながら、わたしは楽しくて 楽しくてしょうがなかった。家に帰ってからも、思い出す度に顔が緩んでしまう。

千里(モノローグ) もう達ちゃんなんかどうでもいいや。どうせ26%なんだもん。それよか高岡さん、高岡文也先輩。そうだ、トランプで相性占ってみよう。

パッ パッ パッ、タラッ タラッ タラッ。 ダイヤ、ハート、ハート、ハート。うーん、10、12、13、エース！ キャー85%！ スゴい、ウソみたい。でも本当よね。スゴい スゴい。

ナレーション わたしは、一人で盛り上がり、この85%を信じ込んでしまった。その時から、明けても暮れても高岡先輩、高岡先輩。とうとう、愚かにも、そう、今考えると本当に愚かにも、この思いを込めた手紙を先輩に出してしまったのだ。

母 千里、お手紙よ。

千里 だれから？

母 えーと、高岡さん。

千里 わっ、ありがとう。

千里(モノローグ) うあーい、こんなに早く来るなんて。さすが高岡先輩。85%だもんね。どれどれ…。

(効果音) (開封)

千里 (手紙を読む)「チサちゃん。お手紙ありがとう。それから、先日はチケットをありがとう。(文也の声に)本当に楽しい一日でした。久しぶりにチサちゃんに会って、中学のころがとても懐かしかった。ところで、あの手紙の返事なんだけど、君の気持ち、うれしいよ、本当に。でも、はっきりするべきだと思うから言うけど、僕の答えは「ノー」だよ。ごめん。チサちゃんのこと、そんなふうに考えたことなかったし、仮に好きだとしても、今のままの君じゃイヤだな。僕が一番がっかりしたのは、君がトランプ占いの結果を頭から信じ込んで、たまたまその相性率が高かったから、僕との仲がうまくいくと思っていること。チサちゃん、それおかしいよ。だって、男女が愛し合うって、大事なのはお互いの相手への気持ちだろ？ 占いの偶然の数字で、“好き”って決めつけられたら、僕はどうなるのかな？ 僕はともかく、木村君だってガッカリしてると思うよ。トランプに限らず、僕

は占ってやつは一切信じない。人間の頭で作り出した偶然の産物に縛られて、僕たちが一喜一憂するのを見て、一番喜ぶのは悪魔じゃないかな。僕は唯一の神であるイエス様だけを信じてる。チサちゃんにも、イエス様にある本当の自由のすばらしさを味わってほしいんだ。祈ってるよ。」

千里(モノローグ) 先輩…。

ナレーション なぜだか知らないけど、涙が出てきた。先輩にはっきり断られたショック。なんだかとんでもないことをしたような恥ずかしさ。でも、なんとなく目の前の真っ暗い暗やみが晴れたような、“イエス様”っていう名前が不思議にあったかく胸に迫ってくるような、そんな涙だった。

(効果音) (電話の鳴る音)

友男 姉貴～、姉貴～。電話、電話だぜ～。

(効果音) (千里の部屋のドアの開く音)

友男 あれ、泣いてんのか、姉貴？ 達ちゃんから電話来てるぜ。また「いない」って言うかい？

千里 (慌てて涙を隠しながら)達ちゃん？ わたし出る。すぐに出る。

ナレーション そう言うなり、わたしは部屋を飛び出していた。

< 完 >